

九州と北海道で「暮らしの保健室フォーラム」開催

ライター
神保康子

「暮らしの保健室九州フォーラム」が、7月27日（土）に、福岡県北九州市にて開催された。主催は、同市内にある「暮らしの保健室 in 若松 こみねこハウス」（杉本みぎわ代表）。基調講演では、「暮らしの保健室」創設者であるケアーズ白十字訪問看護ステーション統括所長・秋山正子さんが、開設から現在に至るまでの活動を報告した。

暮らしの保健室の6つの機能

暮らしの保健室は、医療・介護に関することを含めた暮らしの困りごとについて、誰でも無料で予約なしに看護師に相談ができる場として、2011年に新宿区の団地に開設されたのが始まりだ。現在、看護師やボランティアによって運営され、①医療や健康に関する相談の場、②市民との学びの場、③安心な居場所、④世代を超えてつながる交流の場、⑤医療や介護、福祉の連携の場、⑥地域ボランティアの育成の場、という6つの機能を併せ持つ場となっている。暮らしの保健室は、志を同じくする人たちにより全国各地で立ち上げられ、その数、今や約50か所にものぼる。

九州フォーラムでは、九州各地で取り組み始めた人たちの実践報告が行なわれた。肝付町地域包括支援センター（鹿児島県肝付町）の保健師・能勢佳子さんは、地域支援事業の一環として、自治体が地域住民と一緒に取り組む暮らしの保健室の形を紹介。集落同士が離れているため、3つの拠点

をつくり、各所で週1回ずつ開催していると話した。そのほか、誰にでも開かれた地域食堂の活動「つなぐ食堂」から発展した暮らしの保健室（大分県九重町）や、在宅ホスピスボランティアによって運営され、がん療養中でも気軽に立ち寄れる「カフェマーノマーノ」（福岡県福岡市）、いつも誰かがいる施設ならではの利点を活かし、特養に併設した「暮らしの保健室in小倉」（福岡県北九州市）、空き家を利用した「暮らしの保健室in若松」など、多彩な活動が約100人の聴衆と共有された。

続けるコツは無理なく楽しみながら

9月1日（日）には、「暮らしの保健室北海道フォーラム」が札幌市で開催された。こちらは新宿の暮らしの保健室と、岩見沢市のささえる医療研究所（永森克志代表理事）が運営する「暮らしの保健室inささえるさん」の協力により実現したもの。

50人の参加者が集まった同フォーラムでは3つの報告がなされた。沼田町にある「暮らしの安心センター」は、社会福祉協議会やカフェ、ライブラリー、デイサービス、クリニックなどが集まった複合施設で、行政の保健師や看護師がさまざまな相談に乗る活動を月1回実施している。また、鹿追町の「訪問看護ステーションかしわのもり」は、年数回の頻度で看護師が相談に乗る「ケアカフェ」のほか、講演会や多職種連携勉強会を開催するなど、出張型の暮らしの保健室を展開。「暮らしの保健室inささえるさん」では、岩見沢市で2か所、旭川市に1か所の拠点をもち、それぞれ月1～4回、暮らしの保健室を開催するほか、理学療法士による体操教室などのイベントも行なっている。「無理なく楽しみながら運営のコツ」という主張を、各々が異口同音に述べたのが印象的だった。

九州と北海道、地域特性がまったく異なる場所でのフォーラムだが、暮らしの保健室は地域の資源を利用することで運営され、各地に創意工夫があることが浮き彫りとなった。また、自治体はその機能に着目し、地域住民と協力して立ち上げるケースが見られ、高齢化への「対策」という側面だけではなく、多世代の暮らしを支える取り組みとして広がる可能性が示唆された。



九州フォーラムの様子